会　議　記　録

高松市附属機関等の会議の公開および委員の公募に関する指針の規定により，次のとおり会議記録を公表します。

会議名	第１回高松市創造都市推進審議会
開催日時	平成 24 年 9 月 30 日(日)14 時～16 時
開催場所	高松市役所　１３階　大会議室
議　　題	⑴　会長・副会長の選任について ⑵　講演「創造都市とはなにか～目指すべき姿と世界潮流」 ⑶　創造都市推進ビジョンについて ⑷　その他
公開の区分	■　公開　　□　一部公開　　□　非公開
上記理由	
出席委員	佐々木委員，中委員，荒木委員，大久保委員，木村委員 中西委員，原田委員，三井委員，小西委員，橋本委員 三矢委員，藪内委員，大西委員，瀧澤委員，徳増委員 広野委員，松山委員
傍聴者	１７　人　　（定員　１００　人）
担当課および連絡先	商工労政課商工係 839－2411

審議経過および審議結果

⑴　会長の選任について

事務局から会長の選任について意見を求めたところ，佐々木委員を推挙する意見が出され，全員一致で了承された。

副会長については，会長が中委員を指名した。

⑵　講演「創造都市とはなにか～目指すべき姿と世界潮流」ついて

講師：佐々木雅幸氏（大阪市立大学大学院創造都市研究科教授）

創造都市の定義を述べ，国外【スペイン・バルセロナ，フランス・ナント，イギリス，アメリカ，イタリア・ボローニャ，アメリカ・サンタフェ】国内【金沢市，横浜市，神戸市等】の事例をあげ，創造都市に取組むポイントを説明した。

⑶　創造都市推進ビジョンについて

事務局等からビジョンの内容についての位置づけ，ビジョン策定への今後のスケジュール，国内の取り組みについて説明した後，意見交換を行った。

（事務局）

⑴ビジョンの内容について，位置づけについて

本市では，目指すべき都市像「文化の風かおり光かがやく　瀬戸の都・高松」を掲げた第５次高松市総合計画を策定し，その基本構想において，「心豊かな人と文化を育むまち」や「人がにぎわい活力あふれるまち」など６つのまちづくりの目標を掲げている。

この６つのまちづくりの目標達成に向けて重点的，戦略的に推進する主要な施策・事業等について，実施年度，事業量等を具体的にする短期的な実施計画として「まちづくり戦略計画」を定めており，資料はこの体系を示したものである。
今回，皆様方にご意見いただきながら策定に取組む創造都市推進ビジョンは，総合計画の中で掲げた都市像の実現を目指すに当たり，文化・芸術のもつ創造性をまちづくりの原動力として活用するという新たな視点にたち，現に実施をしている総合計画の中の政策・施策などの組み合わせ・配列・重点を考え整えるためのものである。また，今後，策定される各分野の計画などにも，ビジョンとの整合性が考慮されていくものとしている。

⑵ビジョン策定への今後のスケジュールについて
【配布資料に基づき今後のスケジュールについて説明】

(アルパック)
国内の取り組みについて
金沢市・横浜市がリーダーとなり，創造都市への実践的な取り組みが行われており，２００４年からは文化庁賞として毎年４都市表彰されている。横浜市のように３００万人を超えるメガシティのみならず東川町のように８０００人をきるような小さな町までもが創造都市の取り組みをしており，小さな農村地域でも創造的な街・地域づくりをしようという動きがあり，創造農村と評される町がある。

【配布資料に基づき，ユネスコクリエイティブシティーズネットワーク加盟都市の紹介，特徴的な都市例として横浜市（文化芸術都市創造事業本部制の設置）・金沢市（２１世紀美術館）・札幌市（メディア芸術部門でユネスコネットワーク申請中）・篠山市（創造農村ワークショップフォーラム）・東川（写真の町）などを紹介】

(会長)
第１回目なので，こういうことを盛り込んでほしい，先ほどの講演や説明に対する意見など，忌憚のない意見をいただきたい。

(委員)
島嶼部の女木島・男木島は瀬戸内国際芸術祭で舞台になり非常に注目された。しかし注目されたことで，コミュニティが右往左往している。家並み・街並みが，過疎化もあり，どんどん壊れている。同時に新しい買い手が登場しつつある。いくつかの物件を市外の方々が押さえるということが起こっている。放っておくと頓珍漢な利用が始まる。早い段階で島ごとの，文化的景観を守る「島づくり条例」のようなコンセンサスを，島外のメンバーも入って少しずつ策定していく。お金だけを持って土地購入した人々に，できないことをルール化するにも条例づくりを早急に進めたい。

(会長)
「文化的景観」はユネスコも無形文化財に位置づけ，国内でも保全の枠組みができつつある。創造都市，創造農村を考える際に景観は大切な要素である。地区指定のようなものを含め，検討し，ぜひ盛り込んでいきたい。

(委員)
　創造は，現状を見直し再生をすることにつながると思う。特に高松市においては栗林公園，屋島など恵まれた観光資源があるが，そのわりには“再生”という段階までは至っていないようにも感じるので，創造都市のもと取り組んでいきたい。
　地場産業はまさに再生につながるのではないか。モノづくりをもう一度掘り返して雇用や地域の再生にもつなげていきたい。

(会長)
　景観の話と重なるが，ヨーロッパではアグリツーリズムとして，農村景観，歴史的景観を保存してそれを訪ね歩くということを基本にしている。例えば，そこにブドウ農家が絡みワインツーリズムは始まる。高松市は周辺の自然景観を含め恵まれた資源が多いので，きちんと自然を保存し，歴史的なものも保存し，雇用や観光につなげていく計画にしていきたい。

(会長)
　モノづくりに関しては，先般，担当課が金沢市を訪ね調査をしているので、何か補足することあればお願いする。

(事務局)
　モノづくりに関しては，条例を制定するつもりであり現在進めているところである。金沢市などとも比較し，高松市にあったものを制定する予定である。

(委員)
　以前仕事の関係で金沢は何度も行ったことがある。金沢市を美術館，町並等，実際に散策して思ったのだが，高松市にも同じものがある。高松市もぜひ創造都市になっていただきたい。

(会長)
　市民の合意が重要になってくる。高松市については私も知らないことが多いので一緒にやっていきたい。

(委員)
　創造的な都市について考える場所（審議会）のはずだが、考える場所が創造的でないというのが気になる。この審議会形式で様々な委員が参加しているが、このスケジュールの中でどれだけ委員の方の想いを聞いて、最終的なビジョンにつながって行くのか？審議の進め方の中に一工夫必要である。
　創造都市を実現するには、絵に描いた餅である理想を求めてつくったところで、実際暮らしている高松市民に根付かないと掲げたスローガンだけで終わってしまう。他都市を訪れると、市民の人々が心底楽しんで取り組まないとごまかしが効かない。観光ビジョンのような外向きの顔でなく、ある種の民意が問われるようなビジョンにしていかないと効力を持たない気がする。
　まずは，この場にいる委員がそのようなコミュニケーションをしていかないと，その他多くの市民に伝えることは難しい。佐々木先生は様々な都市で創造都市の取組を進めているので，創造的な議論をするうえで有効な手法やワークショップの方法があればぜひ教えていただきたい。

（会長）
　金沢市では，経済同友会が創造都市会議と金沢学会というものを隔年開催し，様々なゲストを国内海外から招いて，いくつかの実験プロジェクトに取り組んでいる。1年間実験に取り組み，うまくいったら行政がそれを施策にする。上手くいかなかったらやめる。という小さな実験を繰り返している。それを続けることでアイデアが関係者に浸透していく。
　新潟でも創造都市の取組が行われているが，会議の場所を毎回変えている。お庭のきれいな古い建物であったり，工場跡を改装したギャラリーだとか，いくつか創造的だと思われる場で議論をすると議論の進み方が変わってきたりする。
　今回，審議会は各界のトップが集っているが，その周辺にＵ―４０など若い人々の意見を聞く場も設けている。さらに周辺にＵ―２０などがあってもいい。センターで議論するよりもフリンジ（周辺）の方がクリエイティブな議論になりやすい。
　行政が難しければ，民間で取組んでいく。実験しながら施策づくりを進めるという方法もある。

（委員）
　趣味やライフスタイルが多様化しているが，最終的な“幸せ”というものは共通していると思う。現代アートが好きな人もいれば古い芸術が好きな人もいる。野菜好きな人も，魚好きな人も，好みは違うけれど，最終的に味わう“幸せ感”は同じである。どういうことが幸せなのか，創造都市が目指す「高松市の幸せ感」を最初に決めたら，各地域の個性（文化や歴史）を活かし，尊重しながら「地域らしい幸せ」を目指せるのではないか。
　また，次世代が創造都市を目指せるように，今のクリエイティブな方々が，子ども時代に何がきっかけでそういう人になったか，というところを深掘りしたらどうか。次の新しい高松を作るクリエイティブ人材の育成，幼児教育に参考になるのではないか。

（会長）
　ＧＤＰ（国内総生産）に代わって、市民の幸福度（＝ＧＮＨ：新しい指標）を上げることが創造都市の目標となりうる。この指標は非常に多様性に富むが、幸せということで共通認識になる。高松市民にとって今より幸せな状態、創造的な状態は端的に言えばどのようなことか？分かりやすく幾つかのシンボルで示せると面白い。計画づくりの時に指標をどう選ぶかということは非常に大事である。

（委員）
　石の現場を歩く取組みをしているが，ここからがアートでここから先はアートでない，という線引きをしないようにしなければならない。見る人も感じ方はそれぞれであり，そのためのインフラ整備も必要になってくる。イベントなどをやるときも，自分たちの感性で「これはいい」と判断できるようにする。
　地場産業として持続可能であることは，商品になってお金が入ってくる，それを見た息子が「父ちゃんかっこいい，俺も継いでいく」となって次の世代に受け継がれていく。この鎖がつながっていかないと持続可能にならない。
テレビコマーシャルなど大規模な仕掛けによって「良い商品」と感

じるのでなく，自分の目で見て「家に置きたい」「食べてみたい」という感性をみがき，地に足がついた展開が必要である。

（会長）
　これまでの東京発の大規模なメディア発信は大きく変わっている。ソーシャルネットワーク等の進歩によって，今やどこにいても誰でもつぶやけるし，発信できるし，世界とつながれる。本物の価値があればあるだけクリエイティブな人たちが集まって来る時代になっている。

(委員)
　盆栽は世界中で認められている。ヨーロッパをはじめ，アメリカなどにも取引があるが，タイのバンコクでは盆栽愛好家は８割方ゲイである。またタイの会社社長さんもゲイが多い。コミュニケーションが上手く，寛容であるなど，色々な意味でゲイの方々はあらゆる能力を持っていると思った。
　犬島の製錬所の跡地が非常に人間の鼓動を打っている様だったので，このような空間で盆栽の展示会をやってみたいとインスピレーションを感じた。高松市内にもあのような魅力的な空間があれば良い。
　話の中で教育の話題が出たが，芸術は小さな頃から教育の一環として感じたり，見せたりすることが非常に大事だと感じた。感受性豊かな子どもを育てれば盆栽にも興味を持ってもらえるのではないか。

（会長）
　イタリアのボローニャにいた頃，イタリア人も盆栽に興味津々だった。その盆栽の過半が高松で生産されていると聞いて驚いたのを覚えている。これからは「高松の盆栽」といったブランド力が重要になり，盆栽高松という風に結び付けて発信すれば強い発信力を発揮するのではと思った。
　私も過去，オーストラリアの友人と『盆栽オーストラリア万歳』という本を出した。オーストラリア人も盆栽の素晴らしさを理解している。盆栽が国際標準であることの表れである。

（委員）
　先生のお話を伺って，情報の発信力をどうもっていくか，テーマをどのように設定するのかが一番重要だと感じた。例えば，玉藻公園では薪能が行われている。まちなかでは大道芸大会が催され，会場になっている百十四銀行の本店は外壁が丸いタイルで覆われている日本でも珍しい建築であるが誰も気づいていない。
　もっとトータル的な発信力があれば，今の高松市でも創造都市に近いのではないかと痛感している。トータルな発信力は創造都市の第一歩であり，また最終到達点ではないか。

(会長)
　発信するコンテンツが多すぎると絞り込めない。重要なのは編集能力である。その編集能力も，大手広告代理店のような外部の編集者が編集するのではなく，地元のクリエイティブな力を使うのがいいのではないか。

（委員）
　高松市の市報を若い人はあまり読まない。
体育スポーツ分野から参加しているが，議論が芸術の方向に向かうことを危惧する。創造都市を考えると様々な分野が関係してくる。これからの高松市はどのような方向に向かうのか，今現在の高松市が抱える問題点について考える必要があり，今の高松市のいいところを伸ばす必要もある。財政的にも逼迫しているので，なるべくお金を使わないでやっていく必要もある。
　次回には，高松市が抱える問題点や良いところについてざっくばらんに話し合えるようにしていただきたい。先進県や先進都市だけを見て議論するだけでなく，高松市の現状にもっと目を向けることも大事である。

（会長）
　高松市が関わる問題点から出発し，どのように創造的に解決していくのかが本来の創造都市の姿である。どの町も産業の空洞化に苦しみ，失業者をたくさん出て，これからどうしていくのか？そこが出発点だった。過去の文化財がしっかり残っているが，現在の産業は衰退している。そのギャップをどう乗り越えたらいいのか，ということを考えたらいい。アイデアを含めて，創造的な議論の場も含めて，創造的に乗り越えられる方法を見つけていくために議論できたらいい。

(委員)
　高松市には宝物，素材が何でもある。伝統産業も観光資源も豊富にある。しかし，屋島はかつて２４０万人が訪れたが，今は５０万人を切っている。漆器も本来，金沢に負けていない。私は金沢をよく訪れるが，２１世紀美術館を見ると「こういうまちにする」といった金沢市長の決断力が感じられる。
　編集能力は本当に必要である。あわせて多少リスクがあっても思い切って大胆にやって欲しい。今までもこのような審議会や会議にいくつも出てきたが，あまり変わってこなかった。

（会長）
　金沢の成功は経済同友会が決断したことにある。経済同友会がリスクを取った。高松市も頑張って欲しい。失敗を恐れないことが重要で，他の町でやったことを真似しても上手くいかない。
　丸亀町商店街のような成功事例もあり，高松らしい取組み方法を探していくと，地元の人の知恵とエネルギーがうまく編集されて合わさった時に流れができる。
　審議会は何か絵を描いて終りではく，小さな実験を積み重ね，検証してまた次につなげる。それは行政だけがやるという仕事ではなくて，民間もリスクを取って進めていく，両輪が必要ではないか。

（委員）
　農業を代表して出席しているので文化芸術に偏らないよう発言する。高松市は良い農産物がたくさんあり，発信もしているが，なかなか伝わらないというのが現状である。名刺に１日果物 200 グラム運動というマークを入れ，高松市だけでなく全国で推進しているが，キャンペーンをしても広まらない，担当者の自己満足で終わってしまう。どうやってうまく伝えていくかに日々悩んでいる。

（会長）
　この委員会は芸術文化の委員会ではない。現代アートの力をうまく活用して農業も創造的にする。スポーツも創造的にする。そしてその最終目的は“みんなが幸せになるために”今抱えている課題をどう創造的に解決していくのか？ということ。そのための実験の場を農業で提供してみても良い。スポーツの分野で提供するのも良い。アイデアと実験の場をこの審議会で提供して欲しい。

(3)その他
　特になし

(4)閉会